

銀 心 中

田 宮 虎 彦

新 潮 社 版



小説文庫

銀 心 中

田 宮 虎 彦

新 潮 社 版

——小説文庫——

★銀心中★

定価 一三〇円

一九五六年一月一五日 発行
一九五六年三月二五日 五刷

著者 田宮 虎彦

発行者 佐藤 亮一

印刷者 山元 正宜

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京三四局代表七一(八)
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷 三晃印刷株式会社 製本 神田加藤製本所

(c) by Torahiko TAMIYA 1956, TOKYO printed in Japan

目次

銀 心 中	五
天 人	三九
老女のはなし	五二
一人息子	七
流浪のはじめ	一〇七
都會の樹蔭	一三七
動物園	一六四
鬼ごっこ	一八七

裝
幀
山
田
申
吾

銀しろがね

心

中

銀 心 中

二三日、ちらちら降つては消え、消えてはまた思い出したように降つていた牡丹雪が、不意に吹雪きはじめた。いつか粉雪になつて、サラサラとかわいた音をたてている。ゴォと風が唸つた。硝子戸ごしに、その風にまきこまれて、激浪のようにのたちまわっている吹雪の灰ずみいろのうねりが、佐喜枝の瞳にうつつた。

「——東京のお客さん、吹雪だどオ」

湯宿の下男の源作が、廊下を小走りに走りながら怒鳴るように聲をかけて、そのまま帳場の方へ階段をおりていつた。佐喜枝は源作の濫い聲が冷たく消えてしまうと、自分も、自分の心に囁きかけてみるように、小さく、

「——吹雪」

と呟いて、炬燵から立ち上つた。からになつていた銚子さきが、そのひょうしに炬燵の山からころころとこがり落ちたが、佐喜枝はものうそうに眼差しまなざしを投げただけで、湯の道具をとつた。朝、眼覺めてから、じつと炬燵にばかりかがみこんでいたので、膝頭がぬけるように

痛かつた。

湯殿は地階にある。湯は、湯宿の直ぐうらを流れている霧生川の、もとは川底であつたという。自然の岩だたみがそのまま残されていて、透きとおつた湯がこんこんと湧き出していた。佐喜枝のほかには誰もいない。吹雪の唸りと、霧生川のせせらぎとが聞えてくるばかりであつた。

この夏、佐喜枝が珠太郎を追つてはじめてこのしろがね温泉に來た時には、この山の中の湯宿の部屋という部屋の窓々に、電燈が明るくまたたいていた。そして、その時は本線の驛まで迎えに來てくれた珠太郎にうながされて、湯殿までおりてゆくと、男や女の湯治客たちが、東京の町の湯のように混みあつていたものだつた。だが、ここ十日ばかり、佐喜枝が何時湯殿におりていつても、湯殿はいつもひっそりと眠つたように靜かであつた。

佐喜枝は透きとおつた湯の中に身體をのべた。白い自分の身體が、自分の身體ではない別の人のようにみえた。すると、佐喜枝の心の眼に、その白い身體によりそうように、長身な珠太郎の骨細な姿がみえたような氣がした。夏に來た時、同じ湯に二人でつかつた時の記憶であつたが、その時には、佐喜枝と珠太郎の二人のまわりに、がつしりと肩や脊の筋肉のもりあがつた、そして、その肩も脊もさんざん野良仕事に灼かれている近在からの湯治客のはだかの姿がとりまいていた。まるで油の中にたよりない水を二滴おとしたような異質の二人の身體を、みんなが舐めまわすようにみていたことも思い出されるのだつた。

湯殿には、芝居の繪看板のような極彩色の繪をそえられて、しろがね温泉の由來書きがかけられている。繪は白猿が桂の木の本の根につかまつていて、傷ついた足を川の流れにつけていた。説明の文句は、佐喜枝はもうそらで覺えているほどだった。最初の時は、その文句を、佐喜枝は珠太郎とはだかの肩をよせあつて讀んだ。ぎょうぎょうしく難かしい文字をならべた文章であつたが、それが、いかにも東京を遠くはなれた東北の淋しい山奥のこの温泉に似つかわしいように思われるのだつた。もつとも、そんな由來書きをそらで覺えるほど幾度も讀みかえすようになったのは、會いに來てくれない珠太郎を待つて、佐喜枝が一人で人氣のない湯につかる日がつづいてからのことだつた。佐喜枝には、その由來書きを讀むよりほかに氣のまぎらせようがなかつたのだ。

それは銀温泉の由來と書かれたあとに、次のようにしるされていた。

今より約五百年前のことなるが當銀温泉主吉野家の遠祖、高倉山山麓、霧生川のほとりに薪樵してありける折、劫經し白猿岩窟よりいで、手にて桂の木の本根につかまり傷つきたる己れが足を川の流れにひたせるを見たり、かくてありし程に白猿の傷癒えたるものの如し、すなわち温泉の湧き出づることを知り、嘉吉三年の頃、そのほとりに假小屋を建て、一族が天然の湯として用いはじめしとなり、因に吉野家の遠祖は稗貫城主藤原千夜又丸が三男業忠公が圓満寺膝立村を賜り膝立藏人を名乗り、その子膝立彈正輝忠公、後の鷹卷安淨寺の開基なるが、永享十二年江刺勢と私闘して戦い利あらず當銀村に敗走し來り、寺子

屋を開塾し、郎黨は土着して林野を開き木樵百姓に變じて世を忍びたりしという、後に寶曆年間、子孫吉右衛門、衆生のため廣くこの湯をひらかんとして安淨寺住僧の計にて役寺の許可を得、天明三年その子吉之助の代となりはじめて長屋を建て湯宿をひらく、これ藥泉靈湯として奥路に名聲高き銀溫泉「桂の湯」別名「白猿の湯」の由來なり。

由來書きの日附は、天保十二年九月とあつた。そして、安淨寺膝立泰全述、客人名須川義武之書より記すと書き加えられていた。

最初に佐喜枝が珠太郎と二人でその古風な由來書きをよんだ時、珠太郎はよみおわつてから、

「むつかしい湯だよ」

といつた。佐喜枝は、由來書きをよみおわるたびに、いつも珠太郎のその聲が自分の耳もとにささやきかけるのを聞くのだつた。珠太郎の聲は、女の佐喜枝の聲よりも細くねばりのある聲であつた。勿論、佐喜枝は、その珠太郎の聲が心の耳にしか聞えない儚ないまぼろしの聲だとすぐに氣づくのだが、そのはかなさに氣づけば氣づくだけ、珠太郎への思慕はいつそう心の切なさをかきたてた。

佐喜枝は幾度も由來書きをよむ。溫泉の泉溫は六十度にも近いので、岩だたみの間から霧生川の流れをひきこんであつて、適度の泉溫をたもつように工夫されている。佐喜枝は川水の流れこむあたりに身體をのぼし、由來書きを幾度もよみかえず。佐喜枝は自分自身では氣

づかない心のどこかで、珠太郎のまぼろしの聲を追いもとめていたのであろう。

珠太郎は佐喜枝の夫の喜一の姉の長男であつた。つまり喜一と珠太郎とは叔父甥というわけだ、年は八つしか違わなかつた。

佐喜枝とでは二つしか違わない。

佐喜枝がはじめて珠太郎にあつたのは、喜一と世帯をもつて、喜一の生れ故郷をたずねた時で、その時、珠太郎は喜一と同じ商賣の理髪業の姉の家で、客の洗髪をしていた。喜一につれられて佐喜枝が義姉の店にはいつてゆくと、手拭いで客の頭をぬぐつていた珠太郎が、ふつと眼をあげて佐喜枝をみた。珠太郎はその時十六であつた。まだあどけなさの残つていた珠太郎の顔が、佐喜枝をみた時、さつとあからんだのを佐喜枝は氣づいた。そして、店の鏡にうつつた笑くぼのうかんでいる色白な佐喜枝の顔も、思わずあからんでゆくのがわかつた。喜一は佐喜枝の顔をまるぼちやな顔だとしていたが、その頃の佐喜枝の顔にも、まだ少女のおもかげが残つていたのだつた。

もつとも、佐喜枝は、その時、義姉の家に一晚泊してもらつたにすぎなかつた。佐喜枝は夫の喜一の長身であることにひかれて結婚したのであつたが、喜一と結婚して生れてはじめて東北に旅して來てみて、長身なのは喜一ばかりでなく、その夜寄りあつた夫の身よりの男たちはみな五尺七八寸はあるような長身な男たちばかりであることに氣づいた。佐喜枝は五

尺そこそこといつた小柄であつたから、そんな人たちが、見上げるほどな長身に思えた。男たちはお互いに酒をくみかわして、ひなびた土地の唄を歌いあつた。哀調をおびた唄で、きいているうちに、佐喜枝にも唄の文句がききとれるようになった。

さんさ踊らば三十が前よ
三十すぎれば子が踊る

したいさせたい娘の願い
させて喜ぶ縋子しゐすの帯

めでたものには胡桃の花よ
長く咲いても實はまるい

長く淋しく唄聲はあとをひいて、旅愁の悲しさを佐喜枝の心にかげおとすのを、佐喜枝は、その夜、不思議に思つてきいていたことを、何時までも忘れられなかつた。

東京の佐喜枝の家に珠太郎が住みこむようになったのは、その翌々年のことで、喜一について修業をつむためであつた。東京で修業したというと、それだけで土地では箔がつくから

である。二年みぬ間に、珠太郎の顔からは少年らしさは消えて、母親よりは父親に似ているのであろうか、中高い面差し、色じろな、品のある青年の顔になつていた。朴齒の下駄をはいて、店の扉をおしてはいつて來た時、頭が鴨居にぶつかりそうに思えて、佐喜枝は咄嗟には、珠太郎とは思いつかなかつたほどであつた。

佐喜枝は、挨拶する珠太郎に、

「まあ、珠太郎さんは幾寸あるの」

といった言葉を、最初にかえした。

「五尺八寸あるかなあ」

珠太郎は、喜一には東北の言葉で話したが佐喜枝には標準語ではなそうとするので、訛りがごちなく言葉にかげおちた。だが、それが佐喜枝の耳には、妙に稚こく、そして甘えかかる聲のように聞えた。そのことは、數日たつうちに、珠太郎の聲のうるんだうつくしさのせいであると佐喜枝にわかつた。

珠太郎は、父のもとで、理髪職人としてはもうかなり年期を入れていたので、喜一から東京風な仕上げを教えこまれればよいぐらになつていた。だから、喜一にとつてみれば、戦争で雇い職人が目立つて少くなつた東京で、手間賃の安い職人が天からころがりこんだといつてもよかつたくらいだつた。最初は一年という約束であつたのだが、その一年の期限がき

れる頃に、喜一は召集をうけた。

喜一は家を立つ時、珠太郎に、

「店をたのんだぜ」

といった。赤紙が来てから、入隊まで三日と間がなかったのだが、その間に、喜一と佐喜枝の二人は、珠太郎にそのことを納得させていたのだ。

その頃、主人が召集を受けた理髪店は、つぎつぎ店をとじていた。たとい、女の手ひとつで店をつづけてゆこうとしても、商賣につかう石鹼や油などを手にいれることさえ出来なくなつていたからであつた。といつて、店をとじては佐喜枝は生きてゆくことが出来なかつた。

佐喜枝は静岡に近い古い東海道の宿場町に生れて、その町に歸れば兄夫婦がいたけれども、^{あにやあ}嫂と仲違いして、友達をたよつて東京に出ていた。喜一と結婚した時も、嫂からひとことも祝いの言葉を言ひよこしてもくれなかつたのだから、店をとじても、その兄の家に歸ることは出来なかつた。戦争はまだ連戦連勝と書きたてられていたけれども、そのかげで、世の中のすべてが、どうなることか見透しさえつかぬようになろうとしていた頃だつた。

珠太郎に店をつづけてもらおうといひ出したのは喜一だつた。咄嗟の判断のようであつたが、丙種も召集をうけることになつてからそのことを喜一も佐喜枝も、口には出さなかつたが心の中では考えつづけていたのである。

喜一が即日歸郷で歸つて来るかもしれないという望みもやがて絶えた。珠太郎の親もとか

らは、珠太郎を歸してくれという手紙が二三度來たが、入隊前夜に喜一が姉夫婦をかきくどいたことが效いたのか、それも程なく諦めたようで、小包みの底にかくして米や麥を送つてくれるようになった。もつとも、珠太郎を呼びかえしてみても、程もなく徴兵検査にかかるわけであつたからでもあらう。

喜一が出征した後、珠太郎と佐喜枝とが店をつづけてゆけたのは一年半ばかりの間のことであつた。もう戦争も、アツツやタラワで、玉碎ぎょくさいという言葉が使われていた。喜一からニュージーニアの島の名を聞いた最後の手紙がとどいた頃に、珠太郎も戦争につれてゆかれた。

佐喜枝は、自分で刈つてやつたあおとした珠太郎の頭が日の丸の旗の波にかくれてゆくのを、上野の驛でじつと見送つた。梅雨の降りこめたむしあつい晩で、入營者だけは、別の改札口から早く汽車にのりこむことが出來たのを、かえつて切ない思いながら、佐喜枝がいつまでも珠太郎の姿を眼で追つてみると、雨にぬれた警官が、佐喜枝をつきとばすように押しのけた。佐喜枝がはつと氣がついた時には、自分のうしろの雑沓の波が、冷たくしずまりかえつて、人一人とおれるほどの空間の中を、白い遺骨を胸にかかえた幾十人もの列が、改札口へつづいていた。

その夜のことを佐喜枝はいつまでもおぼえていた。喜一を見送つた夜よりも、佐喜枝には珠太郎を見送つた夜の方が忘れられないのだつた。白い遺骨の箱を胸にかかえた人の列は、みなこわばつたこわい顔をしていた。佐喜枝は、その箱の中に、今、眼の前から消えて

いつた珠太郎が、すつと吸いこまれてゆくような氣が、何故ともなくした。すると、はじめて自分が珠太郎の家をたずねた時、自分を見て、さつと頬をあからめた珠太郎の顔が、大きく眼の前にひろがつてゆくのを感じた。

佐喜枝は思い出すのだが、その夜、佐喜枝は珠太郎へいだいている自分の愛情に氣づいたのだつた。やがて發車の時刻になつて、ホームの方から萬歳を叫ぶどよめきが、潮騒のように聞えて來た時、涙がぼろぼろとめどなく佐喜枝の頬にこぼれおちた。

しかし、佐喜枝は、珠太郎に對する自分の愛情に氣づきはしても、それが夫の喜一を越えたものだとは思ひも及ばなかつた。喜一が輸送船もろともニューギニアからフィリッピンに轉進する海上で南海の底に沈んだという内報を受けたのは、それから間もなくであつた。既に東京はアメリカのB29の空襲を受けはじめていた。佐喜枝は珠太郎がいなくなると店を始めて、町内で一軒だけ残つていた同業の店に手傳いに出かけてゆくようになっていたが、その店も、佐喜枝の店も、敗戦の年の五月初めの空襲で、焼爆を受けてしまつた。

佐喜枝は、中央線沿線の、焼けのこつた町の理髪店に住みこんで、何とかあえぎあえぎ生きつづけていた時に、敗戦を知つた。とうとう敗けたらしいことは客の噂で二三日前にきかされていたが、店主の啞の子供が父親に澄んだ聲ではつきり敗けたとつけている聲をきいた時、佐喜枝は、はりつめていた氣持が、ぶつと絲がきれたようにゆるんでしまつたように思つた。五月から八月のその日まで、生きている氣持は佐喜枝になかつた。家を焼か